

中医学の叡智で限界を突破する

－日本で突破すべき課題とそのヒント－

加島雅之

熊本赤十字病院 総合内科 部長

中医学はいまや全世界に広がり、西洋医学に次ぐ、世界医学的な様相を呈している。日進月歩する西洋医学の進歩の中で、このように中医学が注目されているのは、西洋医学では及ばない問題を中医学が解決できるまたはその可能性があるからに他ならない。中医学全体として取り組むべき、その叡智を活用し解決すべき臨床分野として、免疫や炎症といった生体の複雑な反応系の問題に対する中医学的治療の方法論確立、また、単に西洋科学の方法論に依拠するだけではなく、中医学の学問体系を検証する外的妥当性としての方法論の確立などが考えられる。一方、今回、第14回中医薬学会の会頭を務めるにあたり、日本において解決すべき課題、中医学の叡智を活用するために必要なヒントを私見として論じてみたい。

1) 理論的課題

中医学が今後その叡智を活用して更なる発展を行い、限界を突破していくために解決すべき理論的課題として、日本においてすべき、また日本でしかできないものを以下に挙げたい。

- 1)-1: 方証相対や一貫堂医学、下剤の使用法などの日本独自の方法論を中医学的理解
- 1)-2: 医学古典の現代中医学による解釈ではなく、それぞれの古典が書かれた時代までの情報での解析
- 1)-3: 鍼灸と薬物療法の真の意味での統一的理解とその適応・位置づけ

1)-1については、日本の漢方において培われてきた方法論であり、中医学にはなく、同じか類似の生薬や方剤を使用しながら、異なる応用の方法論が開発されていることは特筆すべきである。例えば、方証相対の方法論により、中医学では慢性頭痛（内傷頭痛）に応用されえない呉茱萸湯や川芎茶調散、五苓散といった方剤の応用が日本では定着している。また、一貫堂医学の体質分類とそれに対応した方剤は、広範囲な効果が得られている。更に日本では江戸時代を中心に下剤を多用することで、慢性的な難病を治療する方法がなされてきた。こうした方法論は単純な中医学理論では説明できないものであり、その解析を行うことで中医学理論の発展に大きく寄与できる。

1)-2については、中国での中医古典の臨床的解釈は現代中医学理論で行われる場合が多いように感じられる。真にその古典を理解し応用するためには、書かれた当時の医学知識に基づいた解釈がなされるべきであり、こうした解釈には、考証学派の伝統が息づく日本の得意とする分野である。

1)-3については、現在の中医学では鍼灸と薬物療法の理論をあまりに同一のものとして扱いきれており、結果として両者の役割分担やその臨床的意義が伝統医学的な立場として統一的に解釈できていない。伝統医学的な立場で両者の違いを説明できることが、それぞれの適応と併用の効果を高めることに繋がるであろう。こうした議論は、職能として鍼灸師と薬物療法を担う医師・薬剤師が分化している日本でこそ行いやすい議論であろう。

2) 臨床的課題

日本の医療環境で中医学がその叡智を活用して限界を突破すべき課題は様々あるが、特に優先すべきと考えられる内容を以下に挙げたい。

2)-1：急性期での医療用漢方製剤の活用法

2)-2：慢性疲労症候群・線維筋痛症・自律神経症候群（体位性頻脈・起立性調節障害）に対する中医学治療の確立

2)-1については、日本の急性期においては医療用漢方製剤が中医的治療の主たる担い手となる。医療用漢方製剤は148方剤しか存在せず、これを開発されてきた経緯やその適応の病態を拡張して、現在の日本の医療環境のニーズに合わせて幅広く応用するためには、中医学理論に基づいた解釈と応用が必要となる。

2)-2について、ここに挙げた疾患群は、慢性疾患の中でも西洋医学での治療法は、非常に限られており、しかも社会的に大きな問題となっているものである。また日本の漢方でも十分に対応できているものとは言い難い。中医学での解析と治療法の確立が求められる重要な分野と考えられる。